

# 平和研究の全体像と『総合研究』の位置づけ

藤丸 智雄

## △Ⅰ▽研究所の「平和」研究

二〇一四年度より、浄土真宗本願寺派総合研究所では、「平和」研究を開始した。二〇一五年は戦後七〇年を迎える節目の年であり、戦争を経験された方々が少なくなってきたこの時期に「平和」について研究を進める意義が強く認識されることに加え、宗門全体で進められる各種「平和」事業の基礎作業を行うという目的を以て、研究が開始されたのである。

総合研究所の「平和」研究は、大きく以下の四つの柱からなっている。

- (一) 仏教や真宗における平和研究の整理
- (二) 平和に関する論点整理
- (三) 有識者からの情報蒐集、有識者を交えた議論
- (四) 宗門内への発信

(一)は、現代という時代からの平和に関する問いかけを設定し、仏教・浄土真宗の教義や歴史からの応答の可能性を明らかにしようとする作業である。すなわち紛争の現実、多様で具体的な平和構築の方法を踏まえ、教義から現実の課題へと架橋する試みである。

従来の仏教と平和に関する研究の多くは、仏典のコンテクストに沿って、戦争を議論し平和を語るという手法で

あったが、戦争や紛争は時代と共に刻々とその様態を変化させ続けているのであり、その変化する現状に何を言うべきかという視点も重要である。そうした仏教と現代とを繋ぐという作業がなければ、ともすると宙に浮いた議論に終始し、具体的な紛争の現実に対して発信力を失いかねない。理念と現実をつなぐための基礎作業にあたるのが、本研究分野の目的である。

(三) は、平和・紛争をめぐる状況について、専門家や現場で活動されている方々から情報蒐集し、その情報を中心に議論を深めるといふ活動である。

二〇一五年二月に、この方針の下「六条円卓会議」を開催した。また、同年七月二十五日には築地本願寺において、平和のシンポジウムを開催した。

「六条円卓会議」では、伊勢崎賢治・東京外語大学教授ならびに西谷修・立教大学特任教授に行った取材をビデオ放映し、中東の現実から考える平和構築の可能性と、宗教者の役割について学んだ。続いて、吉田正紀・慶應義塾大学特別招聘教授、海上自衛隊元海将から、東アジアの緊張状態についてご説明いただき、東アジアの現実について学ぶ機会を得た。さらに、こうした状況について、日本の仏教・浄土真宗の歴史的知見から藤原正信・龍谷大学教授からコメントをいただき、小林正弥・千葉大学教授のファシリテーターのもと議論を深めた。この内容については、二〇一五年六月現在『宗報』に連載中である(二〇一五年十一月号まで連載予定)。この「六条円卓会議」では、紛争や緊張状態についての現実を知った上で、平和についての宗教者の役割を考えるとということが主要テーマであった。

七月二十五日に築地本願寺で開催されたシンポジウムでは、チベットと中東情勢から考える平和構築をテーマとし、伊勢崎賢治氏、池内恵・東京大学准教授、定光大灯・RO代表にご登壇いただき、議論を行った。特にチベット難民の問題は、六条円卓会議では課題とできなかったものであり、チベット難民の実情を通して、仏教と紛争に

ついで、議論を進めることができた。

これら二つの活動（会議・シンポ）は、有識者や平和活動に従事されている方から紛争の現況についてご教示いただき、紛争の実情から、具体的に平和実現の方途を模索しようとするものである。

〔四〕は、戦後五〇年時期の活動を踏まえたものであり、平和を目指す活動を宗門全体に波及させていくことを目的としている。

平和研究を宗門の活動として捉えた場合、京都の本山だけで進められるのではなく、宗門全体への波及効果が要請される。戦後五〇年の折にはパネルが製作され、パネル展が広く各教区において開催された実績がある。さらに、写真資料に解説を加えた簡便な冊子も作成され、その冊子が各地の寺院に配布されたことにより、宗門全体に平和活動を広げられた。この活動実績を二〇年前の過去のものにするのではなく、その後の二〇年間に生じた紛争や暴力に関する資料を加えることで再生させようとするのが、本研究分野の目的である。

研究所が製作したパネルは、八月十六日に本願寺で開催される追悼法要において、また毎年九月十八日に開催されている千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要の前後の期間、築地本願寺にて展示される予定となっている。

さて、〔一〕がこの『浄土真宗総合研究』（以下、紀要）の役割ということになる。総合研究所が発刊する本紀要はテーマ性を明確にし、二〇一五年度から、新たな装いで出版されることになった。今回は、その新しい形態の第一号であり、テーマは上記〔一〕～〔三〕に繋がるものとして「平和と宗教」と設定された。紀要は、アカデミックな性格を持つ出版物である。学術的成果においては新規性が求められるのだが、今回の紀要では、これまでの平和研究あるいは平和活動の歴史の一端を整理することを第一の目的とし、新規性については多くを問うていない。

前述の通り、宗門内外における平和研究の歴史は長く、龍谷大学歴史学科をはじめとする各種研究機関で貴重な研究成果が蓄積されてきた。そうした平和研究の長年にわたる功績を無視することなく、現代的な研究につなげた

いという意識の元、本紀要は編まれている。さて、そうした目的で作業を進める中で明らかとなったのは、まとめ尽くせない平和研究の重厚さである。平和研究は、釈尊のアヒンサーの宣言から始まった仏教の二五〇〇年に及ぶ営為そのものである。その歴史は誠に広く深く、本紀要では、そのほんの一滴を整理するにとどまらざるをえない。特に、仏教の歴史全体における平和問題については準備が間に合わず、今後の課題となった。本紀要の第一章では多くの紙数を割いて、この整理を行っている。

続いて、第二章では、外部の専門家を招聘した研究会を元に、最新の研究成果についても紹介している。中島岳志氏による近代真宗についての論考と、伊勢崎賢治氏による紛争の現場から見た平和構築の二本を収録しているが、いずれも平和問題への重要な問題提起となっている。

以下では、本紀要に掲載された個別の論考を概観し、紀要全体の構成を示す。

## △二▽平和研究の視座

### ◆第一章 平和研究の分析

第一章の編集方針としては、前述の通り、宗門関連の平和研究・平和活動を整理することを目的としている。(第一章は、浄土真宗本願寺派総合研究所の研究員が執筆した原稿によって構成されている。)

第一節・坂原英見「平和」を考える一視点―特に感情的動機について―は、これまでの宗門の平和活動について、クリティカルな視点から整理分析を行ったものである。坂原論文の特徴は、「感情的動機」に視点を当てている点にある。坂原は、宗門の種々の平和活動に自ら身を投じてきたが、その活動が「何が起こったか」という「事実」の究明に偏重しすぎていたのではないかと自省する。歴史は事実であるとともに、そこに感情が介在し、絡みつい

ているということを見落としてしまうと、元来「感情」によって複雑化するという紛争の「事実」を見逃すことになるのではないかと極めて本質的な問いかけである。藤井陸代さんの千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要に対する感慨を記しながら、坂原は感情を記述していくことの重要性を主張する。この紀要が編まれているのは、戦後七〇年という時期であり、戦争を直接経験した人の記憶が失われていく中で、記憶をどのようにとどめていくかというのが、私たち日本人全体にとって大きな課題となっている。そして、風化させることなく、記録し記憶するときに注意すべきは、そこに「事実」だけでなく、その時代を生きた人びとの「感情」を書きとどめなければならぬということであり、そのことが本論の主調音となっている。その意味で、本論は、戦後七〇年の平和活動、平和研究全体への基本的視座に関する問題提起であると言える。

第二節・金沢豊「瞋恚という苦への対処法―平和構築の手がかりとしての『入菩提行論』―」は、八世紀の仏教者シャーンティデーヴァ『入菩提行論』を取り上げる。『入菩提行論』は、菩提の完成を目指す大乘菩薩の歩むべきあり方を、美しい韻文で綴ったシャーンティデーヴァの代表的著作である。シャーンティデーヴァは、極めて個人的な内省から、平和へと向かおうとする。八世紀とは、イスラームという中東で生まれた宗教がインドに流入していた時代でもある。こうした時代状況の中で、あくまでも内省的なあり方に徹底し、あらゆる問題の根底に、自己中心性、自己閉鎖性があるとシャーンティデーヴァは説きつづける。暴力の原因である怒りは人間存在にかならず生起するものであり、怒りが暴力を肥大化させ、暴力の連鎖の要因となる。この制御不能に陥りがちな怒りから暴力への変換、そして怒りと暴力の終わらない連鎖を、「心の在り方」や「縁起」によって絶とうとした八世紀の仏教者の試みは、今も輝きを失っていないように見える。

現代の平和論においては、戦争が起こっていないという状況だけでは暴力が終わっていないと論じられる。貧困

や飢餓、様々な差別的状況や排除といった争いの背景問題に働きかけ続け、これらの社会課題を解消することの中に平和の永続性を見いだそうとするが現代の平和論の一つの特徴でもあるのだ。こうした考え方と、シャーンティデーヴァの論を比較すると、八世紀の仏教者の思想と現代との接続を見ることができよう。

第三節・岡崎秀麿「戦中・戦後の真宗教学者の動向」は、題目の通り、戦中・戦後の浄土真宗の「教学者」の発言を丁寧に追ったものである。こうした視点の研究は既存のものの中に多く見られるものであり、本研究はそうした論考に基づきながら筆者の視点から再構成を行ったものである。岡崎が重視したのは、政教関係を近世社会からの連続性で見ているかとした点である。日本の政治状況の中で、どのようにして真宗の「教学」が利用されていくことになったのか？あるいは、協力するようになったのかを整理する。教学とは、本来、変化しにくいものだが、この硬性の言語活動が時代の要請に応じながら、むしろ積極的に対応し迎合していく。それは時に、政治を先導するような形で進んでいくのだが、その局面を、近代国家の政教分離原則の受容の中で岡崎は検証している。

明治維新以降、日本は近代国家への歩みを急速に進めていく。近代国家はいくつかの原理によって構成されるが、そのうちの 하나가ウエストファリア条約を契機として導入された「政教分離」である。十八世紀、ヨーロッパでは宗教が関係する紛争がやまず、政教分離という考え方が導出され、政教の調和が図られた。この原則により宗教は、私的領域において如何なる強制や侵害も受けないことになるのだが、この原則が日本に導入されたとき、真宗教学者は神道との差別化を図ろうとする余り、仏教Ⅱ私的領域、神道Ⅱ公的領域という構図を描いてしまう。その結果、図らずも、国体論を宗教的に下支えする理論構築に負担することになるのである。

第四節・竹本了悟「〈研究ノート〉集团的自衛権に関する論点整理」は、「集团的自衛権」についての議論をまと

めたものである。現在、国会で集団的自衛権をめぐる議論が行われている（本紀要が出版されるときには、法案成否の結果が出てくる）。この日本という国家のあり方をめぐる法案について考える上では、集団的自衛権についての正しい理解が必要である。しかし、竹本が冒頭で指摘するように、「集団的自衛権」という概念の理解についてさえ、法学者の間で違いが見られる。つまり、「集団的自衛権」を一部可能にしようという議論は、どのような「集団的自衛権」を選択するのかという議論でもあるのだ。

また、「集団的自衛権」とは歴史の悲劇に基づいて、構築された考え方であることも忘れてはならない。すなわち、個別的自衛権は全ての国に認められた権利なのだが、一国だけでは防衛することが困難な場合がしばしば生じうる。そうした緊急事態において、（最近では近隣諸国が協力する場合が多いようだが）侵略された国家を時限的に（国連決議が行われるまでの間）保護するために考案されたのが集団的自衛権である。ルワンダでは、他国が軍事介入に躊躇したために一〇〇万人もの人びとが短期間の内に虐殺されるという悲劇が起きた。こうした悲劇が起きないよう、緊急避難的に軍事介入を行うことを可能にしようとするが集団的自衛権の本来の発想である。

こうした「集団的自衛権」の基礎的な理解を進めるために、この「研究ノート」が掲載されている。

以上が、第一章である。第二章は、外部の先生方との研究会などによってご教示いただいた内容を紹介している。

### ◆第二章 平和研究の現在

第二章では、現在、平和研究を主導されているお二人の研究者の論考によって構成されている。

一本目の中島岳志『親鸞思想はなぜ超国家主義へと接続したのか』は、戦前の日本が超国家主義（ウルトラ・ナショナリズム）に陥っていく時に、その思想を構築した当時の代表的な知識人たちが、親鸞思想に傾倒し、親鸞思想に基づきながら超国家主義を構想していく状況を、見事に描出されている。中島氏自身にとって、親鸞思想は「思

考様式を中心」であり、だからこそ、なぜ親鸞思想が超国家主義というあだ花を咲かせる要因の一つになってしまふのかという問題意識を強く持ち、丁寧な検証がなされていくのである。

「二君万民」、すなわち天皇のもとですべての人々が平等であるという考え方に基づいて明治維新が起こる。しかし、実際には藩閥政治が残存し、天皇の大御心に基づいた国家が実現されない。こうした状況への不満や不安、自我の危機が、愛国主義、天皇主義、右翼思想の源流を生み出す。そして、この「大御心」と「他力」とが重ね合わされて理解されていくようになる。この親鸞理解は、親鸞思想を専門とした暁烏敏などにも見られるものである。とかく「真俗二諦」によつてのみ、親鸞思想と戦時思想の接近を見がちであるが、より根本的な「他力」という教義が超国家主義と結び付いていったことへの中島氏の指摘は、真宗教学に対して重要な問題提起となっている。

二本目の伊勢崎賢治「宗教と平和」は、『宗報』に連載されたものを、まとめたものである。伊勢崎氏は、多くの紛争の現場に立ち、実際に平和構築の交渉の場で活躍されてきた。そうした生の紛争現場における経験の中から、紛争がなぜ起こるのか、起こってしまった紛争は、どうしたら止められるのか、争いを再発させないためには何が必要なのか、紛争を未然に防ぐための準備としては何をすべきかについて説く。そして、この議論の中で、宗教者の役割についても言及されている。

二十一世紀になり、国家間の戦争から、内戦や国境を超える形での紛争へと、戦いの様態は変化してきている。その変化に対応していくために、国連などの諸機関は、平和構築の手段を模索し、研究者は平和構築の理論を作ってきた。書店に行けば、平和構築のための書籍が、所狭しと並んでいる。グローバル化が進み、テロも余所事ではない。紛争の現在の状況から、私たち宗教者がなすべきことについて考える上で、示唆深い議論となっている注目すべき論考である。



### △三▽平和研究の眺望

研究所における平和研究は緒に就いたばかりである。当初、研究がどのように構成されるべきか、その全体像を見通すことさえ困難であった。しかし、半年ほど闇雲に研究を進めていった中で、浄土真宗本願寺派総合研究所における平和研究には、大分して三つの課題があるのではないかと考えている。

一つは、「平和主義」という課題。「平和主義」は、「理想主義に過ぎない」「現実と乖離している」という批判がしばしば聞かれる。もちろん、仏教が平和主義であるということは、否定できない。それならば、仏教の平和主義が、広い△平和主義▽概念の中で、如何なる領域に分類されるのか明らかにされねばならないし、その平和主義が現実に対して思想的・実践的に有効であると、立証していかねばならないだろう。金沢論文は、この点に切り込んだ論考となっている。仏教という平和主義の力についての検証、これが一つ目の課題である。

二つ目は、宗教と戦争に関わる課題である。本紀要でも岡崎論文と中島論文において、教学や根本的な思想から、戦う原理が導出されていく状況が明らかにされた。このことは、やはり宗教の持つ何らかの危うさを示しているのだろう。宗教者の側から、その危うさについて検証する必要があるのではないか。国家と宗教のためにしか人は死なないとも言われる。また、現在も宗教が介在した紛争が世界各地で勃発している。こうした現実に向かいあうために、宗教の持つ排他性／求心力の危うさを自ら摘出していくことが必要である。これが、二つ目の課題である。

三つ目は、平和を形作る方法としての宗教という課題である。紛争の現実の中から、具体的に平和を作り出すために、平和な状況を生み出すために、宗教者や教団は主体的にどのような活動しうるのだろうか。世界の様々な場で、多くの人びとが命がけで争いをなくすための、具体的なアクションを起こし続けている。私たち宗教者のこれまでの平和活動を検証し、さらに現実の紛争に対してなしうる平和活動の可能性をしっかりと考え、実践しな

ればならない。ここに焦点をあてているのが、竹本論文、伊勢崎論考である。

本紀要から始まった平和研究の歩みは、既述のように始まったばかりである。研究所として、これからも平和研究を進め、仏教思想の主要テーマと紛争の止まない現代とを架橋していく営為を継続していきたい。